巻頭言

歴史遺産感動の３要素

伊　東　　孝

建造物的な歴史遺産には，建築遺産・土木遺産・産業遺産の３つがある。それぞれの違いを，土木の世界で戦前からいわれている構造物の三位一体論「用･強･美」を軸にして整理すると，**表―１**のようになる。

1．３つの遺産の相違

建築物は，外観や内観（インテリア）の「美」を重視するのに対し，土木構造物は「美」のウェイトが軽い。産業施設では，「用」を最重要視する。このちがいは，保存や修復理念にも影響する。竣工当時がもっとも美しい建築物の修復理念は，当初復元が原則である。主にインフラ施設を担い，「用」「強」を重視する土木構造物は，永遠性（長持ち）を希求する。近代になって登場した鉄橋やコンクリート橋は，当初「永久橋梁」と呼ばれたこともあった。これに対し，産業施設は建物内の機械類が大切であり，建物はそれを保護するもので，一定期間の仮設構造物である。

以上は極端な言い方だとは思うが，３者を理念的（理論的）に区別できる便利な見方と思っている。また表には，「システム，ネットワーク」「所有者・工事関係者」の欄も設けている。後者の「所有者･関係者」は，遺産を管理・保存するときの必須項目である。

2．歴史遺産感動の３要素

遺産による「用・強・美」の重点の置き方の相違は，評価にも関係してくる。世界遺産や文化財の評価は各分野と学術的な面からいろいろ分けられるが，素人にわかる評価は何だろうか。言いかえれば，素人が歴史遺産に感動するのは，どのようなときだろうか。わたしはそれを，「歴史遺産感動の３要素」として仮説的に次のように整理している。「“ワオー！”効果（Waoo! Effect）」「わかりやすさ（Legibility or Simplicity）」そして「“がってん！”効果 or “なるほど！”効果（Aha! Effect）」である。

Waoo! Effect は，遺産をひと目見たとき，感動のあまりに発する感嘆詞であり，Legibility or Simplicity は，見た目のわかりやすさ又はストーリーや論理のわかりやすさである。Aha! Effect は，Legibility or Simplicity に伴う「ああ，なるほど！効果」である。脳科学者の茂木健一郎氏は，ひらめきや気づきの瞬間

表―１　建築遺産・土木遺産・産業遺産の相違

	建築遺産	土木遺産	産業遺産
用･強･美	***用･強･美***	***用･強･***美	***用***･強･美
建造物	構造材 ＋ ***外装材･内装材***	***構造材***そのもの	内部の機械類が重要 ***工場は仮設構造物***
システム ネットワーク	単体	地域･国土 (ネットワーク、 システム系)	地域･地区内限定 （システム系）
所有者･ 工事関係者	個人･法人	国･自治体	法人

に「あっ!」と感じる体験を「アハ体験」として紹介，アハ体験は脳を活性化させるといっている。これを援用すれば，遺産も「アハ体験」になるような「見た目のわかりやすさ，ないしストーリーのわかりやすさ」が必要ということになる。

社寺仏閣や城郭などの建築遺産は，素人がみてもわかりやすいし，ワオー！効果がある。これに対し，産業遺産は見た目は美しくないし，油臭い，むしろよごれて汚いものが多い。施設や機械も見た目ではわからないものが多く，なかなか興味がわかない。動かないモノになるとなおさらである。施設を解説するインタープリターが必要となる。しかし産業遺産には，場所が広く，モノが大きく，深さや高さもある。身体で実感して，強い印象と大きな感動を味わえる場合も多い。土木遺産は，両者の中間として位置づけられる。

3. 遺産の「文脈」から「謎解きや解釈」へ

最近，「これが世界遺産？」というようなものも増えてきた。説明を聞いてもピンとこない人もいるにちがいない。たとえば一昨年世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」は，全国の8地域，23の構成資産から成り立っているので，構成資産をみていくと「これが世界遺産？」と感じられる方も多いと思う。「明治日本の産業革命遺産」は，全国8地域23の構成資産がワンパック（シアリアル・ノミネーション）で世界遺産として評価された物件なのだ。19世紀の後半から20世紀初頭にかけ，日本は産業国家に変貌，工業立国の土台を構築した。そのプロセスは世界に類例のないことが評価されたのである。

わが国では世界遺産の歴史は20年余りだが，世界遺産自体は倍の40年以上の歴史があり，世界遺産の評価視点も多様になってきた。背景には，世界遺産が1000を超えるようになると，ピラミッドやポンデュガールなどのように，一目見ただけで“ワオー！”といえるようなものは少なくなってきたことがあげられる。

今年(2017年)の5月，台湾でAsia-European Industrial Heritage Networking Round Table Symposiumが開催され，わたしも日本代表として参画した。そこで興味深い講演を，ベルギー・ゲント大学のウィリヘルム・デルデ先生から拝聴した。それは，世界遺産の評価が従来の遺産の文脈を理解する流れから，遺産の何を解明し（謎解き），全体としてどのようなストーリーになるのか，に重点が移行，それとともに遺産の保全の仕方も変わってきているということだった。彼は，それを「From Monument to Context」から「From Conservation to Interpretation」として説明した（筆者の英語の理解不足があるかも知れないが）。

「明治日本の産業革命遺産」は，まさしくこの流れの中で評価された世界遺産である。日本の土木遺産や産業遺産の評価も，謎解きやストーリー面の意義を重視し，それをいかに「わかりやすく」説明するかに重点が移るのではなかろうか。素人向けにわかりやすく説明し，「アハ体験」をしてもらえれば，歴史遺産に対するファンが増えるし，行政や企業なども保全のための費用を出しやすくなる。

4. 遺産概念の広がり：「20世紀遺産20」

「遺産」は，いまやブームである。しかしわたしがある業界誌でカメラマンの三澤博昭さんと今でいう土木遺産の連載をしたころ（1987年），「土木遺産」という言葉はご法度であった。「遺産」は古くさいし，残されたもの，利用できなくなったもの，というイメージがあり，よくないといわれた。仕方なく，「近代土木構築物」というタイトルで連載した。

しかし今や遺産は，近代を跳び越え，現代のモノまで含むようになった。ご存知のように，昨年，戦後の1959年に竣工した国立西洋美術館が世界遺産に登録された。

世界遺産委員会では，数年前から各国に「20世紀遺産20」を呼びかけている。20世紀につくられた構造物で，世界遺産の候補になりうるものを20，リストアップせよという呼びかけである。むずかしいのか，様子見なのか，いまだに各国ともリストを出していないが，日本ICOMOSではワーキンググループをつくって，その作業をした。どのようなものがリストアップされたのか。土木構造物では，以下のモノが候補にあがっている。

立山砂防堰堤群，瀬戸大橋，東海道新幹線などである。

「遺産」は，「保存」するだけではなく，「創造」するものでもあることがわかる。

《参考文献》

1）伊東孝「近代文化遺産の保存理念と修復理念」『近代文化遺産の保存理念と修復理念』東京文化財研究所，2017年
2）『2017欧亜産業遺産区域網路国際円卓論壇　論壇手冊（五）』台湾文化部文化資産局，2017年

――いとう　たかし　産業考古学会会長，
日本ICOMOS「技術遺産小委員会」主査――